

「不可思議」とのであい

— 教えと悟り —

福 島 光 哉

一

ただ今ご紹介いただきました今年度大谷大学仏教学会会長の福島です。

皆さんと、このように向かい合うのはおそらく今日が始めてであろうかと思いますが、仏教学会の新入会員の方がたを歓迎する気持ちをこめて、しばらくの間お話を申し上げることになりました。大谷大学の仏教学会では、大学院の仏教学専攻に入学された方がたと、文学部仏教学科の二回生になられた学生諸君を仏教学会に迎え入れることになっておりまして、私たちと共にこれから本格的に仏教研究を目指し、ともに学んでいく喜びを分かち合いたいと心から願っておるような次第です。

一般に同じ学問分野の研究を目指すものは、どのような学問分野であっても互いに喜び合えるものでありますが、私たち仏教学を志すものにとってはその喜びも特別な意味をもっていると考えています。それは他の学問分野の研究とは違ひまして、仏教学の研究はただ未知の仏教を知って共通の知識を共有するというだけでなく、仏教研究を通してこの道をあゆむ我われが、たがいに人間として深められることを実感していくことができるのではないかと思うか

らです。言いかえますと、仏教学はこの研究を進めて多くの研究成果をあげると同時に、研究している私たち自身に對して眼を向けることになり、それによって互いに人間としての大きな課題を共有していることに気付くからなのです。私たちも先輩の方がたから「仏教の研究は解答を求めると同時に、問題の所在を明らかにすることだ」と教えられたのですが、いま皆さんを前にしてそのことがあらためてあざやかに想い起こされて来るのです。このことは言い換えれば、主体的に仏教を学ぶことであり、仏道を歩むということになるのでしょう。

さて先程司会のロバート・ローズ先生が紹介してくださいましたように、今日のテーマは「不可思議とのであい」ということになっております。何だか奇妙な、つかみどころのないテーマだという印象を皆さんは受けられるかも知れません。「不可思議」というのは分からんということなのですから、そういう不確かなものとの「であい」なんて、これもはなはだ考えにくいということは当然だと思います。ところが私たちが親しんでいる数かずの經典には、この「不可思議」という文字がたびたび登場してくるのです。そればかりではありません、經典にはたいへん重要な意味をもつ言葉としてこの「不可思議」という語が使われていることに気付かされるのです。たとえば二回生の皆さんが今年的基础講読でテキストとして使われている『維摩經』というお経がありますね。このお経はくわしくは『維摩詰所說經』というのですが、この経題の下に小さな文字で「一つに不可思議解脱經と名づく」と書かれています。もっともテキストによってさまざまでしょうけれども大正大藏經に収められている『維摩經』の場合には、いま申し上げた言葉が付記されています。このように、皆さんが最も親しんでおられるお経の題目にも「不可思議」という語が見られますし、さらに『維摩經』をずーっと読んでいきますと「不思議品」という一節があることがわかります。そのほかよく知られている『法華經』の場合も、くわしくは『妙法蓮華經』というのですが、この題目にある「妙」というのは古くから「不可思議ということである」と解釈されて来ているのです。このようによく知られている經典の題名にも使用されているのですから、經文の中にはしばしば見いだせる言葉であることは、いうまでもありません。

そこでこれからいよいよ本格的に仏教研究に進まれる皆さんに、やがて必ず触れることになる「不可思議」という仏教語を通して、今日は私なりに日頃から感じております事柄をお話してみたいと思います。

「不可思議」という言葉の意味は「思議す可からず」すなわち「考えることも語ることもできない」ということでありましょう。「思」とは思う・考えるなどわれわれの精神的なはたらきを云うのでしうし、「議」というのは語る・議するということから言葉や文字で表現することをいうのでしう。したがって「不可思議」とは言葉や文字でもあらわせないし、考えることさえもできないということになります。一体、「不可思議」とは何ぞやと問うこと自体がおかしいのであって、その語ることも考えることもできないことを課題とする方がよっぽど不可思議なことと云わねばならないかも知れません。ましてそういう「不可思議」なるものとの「であい」というに至っては、いよいよ課題の何たるやを知るべくもないではないか、とお考えになるかも知れません。

しかし、私たちは日常生活の中で、突然強い感動を受けたり、深くかみしめなければならぬ事柄に直面したりすることがありますが、そのような場合は大抵ただちに言葉にもならないし、思考することも及ばないことを体験いたします。そのような時、思わず「不思議だ」とつぶやくほかはないのでしう。あるいは、じっくり考えてみて道理に合うことや、筋道がはつきりしている時などは決して不思議でも何でもなく、言葉で表わすことができるのでしうし、考えの及ぶことであろうと思ひます。けれどもことに私たち人間の内面に関わることで、筋道も通らないし理屈にも合わないこと、したがって言葉にもならない事柄に、いくらでもぶつかっているのです。このように考えてみると、「不可思議」という言葉も私たちの生活につねに付き纏うかけがえのない言葉だということになるだろうと思ひのです。

さて、この「不可思議」という語は先程も言いましたように、經典にはよく見かけられるのですが、この言葉にだけ注目していたのでは本題にはいることはできません。私たちにとってこの言葉の意味するところを少したづねてみる必要があります。そこでまた經典を開いてみますと、直接「不可思議」という言葉・文字ではなくても、内容的には「不可思議だぞ」と頻りに語りかけていることがしばしばあることに気付かされるのです。たとえば先程申しました『法華經』について言いますと、有名な語句で「諸法寂滅の相は、言を以て宣ぶ可からず」というのがあります。これは少し難しい言葉ですけども、「諸法」というのはこの世界でのもの有りようということで、私自身をふくめてすべての人々の生きざまを示すのでしよう。そのすべての生き方、生きようを、そしてあらゆるものごとの有りようを指して、これが「寂滅」のすがたであって言葉ではとても表すことができない、と説いているのです。私たちの生きようを指して寂滅、すなわちいかなる活動も働きもない、静寂で不動のすがたであるということは、もとより私たちの常識を遥かに超えた、とんでもない把握の仕方であると考えざるを得ません。けれどもそのことこそが、「諸法寂滅」のすがたこそが真実のありようなんで、したがってそのような「寂滅の相」というのは、言葉や文字をもって表現できるものではない、と『法華經』には説かれているのです。これなどは「不可思議」を別の言葉で表現された典型的なものと言うことができるでしょう。しかもお経はこの「不可思議」なところにこそ実は重大な深い意味があるのだと力説しているのです。

このような「不可思議」の言葉がもつ意味を少しでも深めるために、次に視点をかえて考察してみることになります。

三

東本願寺・真宗大谷派において毎月刊行している『同朋新聞』というのがあります。皆さんの中には愛読しておら

れる方もあるかと思いますが、最近出版されたこの『同朋新聞』（一九九六年二月号）によりますと、一九九八年に東本願寺において蓮如上人の五百回御遠忌法要が営まれることになっていのですが、それを迎えるにあたって一つのテーマを掲げることになりました。そのテーマというのは（バラバラでいっしょ）というのです。これは二年後の御遠忌法要が真の意義をもつには、現代に生きる我われが蓮如上人の精神をあらためて再発見し、その精神を現代に具現するとはどういうことか、そして今の私たちにとって何が最大の課題であるのかを問い直そうとすることだと思います。そしてそのテーマとして定められたのが（バラバラでいっしょ）。真宗大谷派という伝統的な宗門が発する言葉としては、一見宗教的な厳肅さに欠けているし、ちょっと馴染みにくいかも知れませんが、しかし私にはそれがまた非常に大胆で、真宗大谷派としては思い切ったテーマを掲げたものだと思いきながら、これは一体何を云おうとしているのだろうかと思えさせられてしまうのです。そこでこのテーマに戻りますが、実はこのテーマと共に「差異をみとめる世界の発見」という語句が付されていて、「差異」にはわざわざ「ちがひ」というルビがつけられています。この語句の方に注意してみると、最初のテーマが何を意味しているのかが一層はつきりしてくると思われまので、そちらの方、つまり「差異（ちがひ）をみとめる世界の発見」について少し考えてみることにしたいと思います。

まず「差異をみとめる世界」というのですけれども、私たちの常識からすれば「差異・ちがひ」がなくなる世界を探し求めてゆかなければならないし、また差異や差別のない世界を実現していくことが最も大切な我われの課題ではないのか、と考えることになるでしょう。ところがここには「差異をみとめる」とは、いったいどういうことなのかと不審に思われてくる。差異を承認し肯定するこのテーマは、少なくとも始めから「なるほど、その通りだ」と納得できるようなものではなくて、むしろ「おかしいぞ」とか「とんでもない、間違いではないか」といった率直な感想をもつことさえあるように思えるのです。しかしよく考え直し読み直してみると、そこには大切な深い意味がこめられていることに気付かされるのではないのでしょうか。今の私たちを取り巻く社会や人間の関わりを振り返ってみ

ると、そこには多くの問題がひしめいていることに誰しも気付いている筈ですが、中でも自分と直接関わっている人間関係の複雑でかつ難しいことに、毎日の日暮しの一齣ひとこまに悩まされ、時にはすっかり落ち込んでしまっているのが私たちの現状でしょう。そしてその人間関係の難しさゆえに、しばしば人との交わりを閉ざしてでもよいから、安定した心情を求めることさえあるのです。このように、いわば逃避ともいえる「人間嫌い」の傾向は、実は老人から幼少年にいたる、あらゆるジェネレーションにわたっていて、それぞれの困難な人間関係の問題を抱えているといえるのです。若い青年の皆さんからすっかり見離された老人たちは、ただ皆さんとの世代の相違だけでなく、同世代の老人相互のあいだにおいても、おたがいの人間関係が難しくなつて来ているようです。あるいはまた可愛い小学生たちのあいだにさえ、いわゆる「いじめ」といわれるような深刻な問題が蔓延していることを思えば、ここにも人間不信に起因する課題が深く根を張っていることに気付かされるのです。その個々の問題については、それぞれの原因やきっかけは異なるでしょうけれども、人間同志のあるべき姿がどこかへいつてしまったのではないかと、悲嘆に暮れるような現実が厳然として蔽いかぶさっているのだと、考えざるを得ないのです。

これらの問題は、わたしたちが精一杯の努力をかさねて議論をし考え抜いても、とても簡単には解決の道を見いだすことができません。むしろ考えれば考えるほど、人間の深い謎に陥つてしまえばかりです。「差異・ちがいをみとめる」というテーマは、このような問題に大胆に取り組む一つの試みとして、提起されたに違いありません。たしかに人間は一人ひとりみな違っているのだけれども、その差異を「みとめる」ということになる、新たに考え直さねばならない問題です。人間関係の難しさのために、人を遠ざけ自から人間関係を閉ざすというのは、いいかえれば「差異」を認めないからではないでしょうか。むしろ「差異」を「差異」として受け入れるゆとり・広い知見、そして寛大な精神を持たないからでしょう。そうすると、「差異をみとめる」というテーマはあらためて大変な問題の提起であり、困難な課題を突きつけているのだなあと、嘆息せざるを得ないので。

言葉としては簡単に「差異をみとめる」といいますが、その中身をあれこれと検討していくうちに、次第にその言葉の奥に淀んでいる人間の割り切れない心情が横たわっていることに気付かされます。仏教で「不可思議」というのは、実はこのような人間の心情の不条理な現われをも指しているように思います。それは人間社会の理想的なありようは、すべての人が共同して助けあい、平和な世界を実現すべきであると知りながら、しかもいつのまにかその理想に背いていくような現実には陥っていくという矛盾、いいかえれば、私の心の中に全く正反対の方向をもつ二つの志向があるからだといえないこともありません。このような自分自身のうちにどうしようもない神と悪魔の両面があつて、それが私を悩まし、問題を複雑にしているのでしよう。

そこであらためて「バラバラでいっしょ」というテーマについて、先程申し上げたように「差異をみとめる」ことを通して「いっしょ」という実感をたがいに共有できる世界を実現する、ということを考えてみましょう。実はこのような現代のなまなましい課題は、すでに經典の上にも現われておりまして、人間の世俗社会の中に生きる菩薩の種々相として、興味ある教説が見られるのです。たとえば『法華経』の中には、菩薩が世俗のさまざまな人たち、中でも悪人といわれる人との関わる生き方を求めようとして、次のようなことが説かれております。それは「常不軽菩薩品」に説かれている一つの典型的な菩薩像を描いた部分でありますし、非常に有名なお話ですので皆さんもよく知っておられることと思います。ここの主人公である常不軽菩薩という菩薩は、まず第一に『法華経』の中に登場してくる菩薩ですから自ら『法華経』の行者であるという強い信念をお持ちの方であることは言うまでもありません。第二にこの菩薩は悪人とめぐり合うことを通して、深く人間の本性を追求した人であると云えます。そして第三にすべての人間の本性が平等であること、言い換えれば善と悪とを超えた最も深奥な人間性を見つめて、そこに拝み合う世

界の実現を目指そうとした人であったということです。『法華経』にはこのように説かれています。

昔、威音王如来という仏が滅度せられて正法の後、像法の世になって増上慢の者の勢力が大きくなっていった。そのとき、常不軽菩薩という名の一人の菩薩があり、出家・在家あるいは男・女の区別なく誰にでも礼拝し讃嘆した。その上で「私はあなたを決して軽んじません。なぜなら、あなたは必ず菩薩道を行じて作仏すべき人だからです」と云った。そして彼、常不軽菩薩は経典を誦誦するばかりでなく、礼拝ばかり行じ、はるか遠くに四衆の人びとを見ては、ことさらに近づいて礼拝・讃嘆し、「わたしはあなたを軽んじません。なぜならあなたは必ず作仏すべき人だからです」と云うのであった。すると四衆の中に、瞋りを生じて不浄な心をもつ人がいて、悪口を言い罵詈し「この無智の比丘はどこから来て、私たちを軽しめないで必ず仏に成るといつて授記するのか、これは虚妄の授記だ」と云う人までいたのである。このようにして長い年月が過ぎて、常に罵詈せられたけれども決して瞋りを生じないで、いつも「あなたは必ず仏に成る人です」と言ったのであった。時には杖・木や瓦・石をもって打擲りかかる者もあったが、その時には遠くへ逃げ去ってからなおも「あなたは必ず仏に成る人です」と呼び続けたというのである。そこでこの菩薩のことを人びとは「常不軽菩薩」と名付けるようになったのである。

以上のように説かれているのですが、このお話は『法華経』の中でもことに有名な物語の一つです。実は『法華経』には現実の諸悪に満ちた社会のただ中であって、菩薩はいかに生きていくべきであろうかという問題をしきりに追求していくことがしばしば見られ、この常不軽菩薩の物語はそのうちの一つの典型であると云えましょう。そしてこういった物語を通して『法華経』は、人間が互いに本当の人間として生き合っていくべき道を真剣に追求していくとする強い精神を求めていることが、まず感ぜられると思います。そのことは常不軽菩薩の場合に限らず、『法華経』に登場してくる他の菩薩たちにも共通して伺えることだと思われませんが、中でもこの常不軽菩薩にはその点が

明瞭に浮き彫りにされているのです。この世俗の中にあつて、世俗の人びとと共にどのようにして「共生」していいのか、ひいては世俗の悪人とともに自分自身が菩薩としての自覚をもつていける道は、いったいどこにあるのかを問うているのです。そこで皆さんもお気付きのことと思いますが、この常不軽菩薩は「バラバラ」で生きている私の私たちに對しても、「いっしょ」になり得る道の一つを示しながら、大きな問いかけを投げかけているのだと云えるのです。そしてその場合大切なことは、常不軽菩薩がいかなる悪人に對してもこれを礼拝し、その人が必ず作仏することを信じて疑わなかつたということでしょう。悪人に對して、無理に我慢をして争いを避けるというなら、私たちにも時折り経験することがあります。「口惜しいけれども、ここは一つこらえて相手の言い分を認めてやつて円満に事を進めよう」といった配慮もしばしば必要ですし、事実このようなことは大切な人間の智慧として尊重されねばならないと思います。けれども、ここに申し上げる常不軽菩薩の場合は、決してこういつた私たちが日常経験するような、意図的な計らいや無理にわが思いを抑えつけるというのではないのです。つまり自分の相手にたいして伏し拝むという行為は、自分の気持ちに反して、あるいは自らを欺いて為されるのではなくて、却つて相手の中に作仏すべき人としての何か（それを仏教では「仏性」と称してきました）を謬りなく見いだして、それへの強い信念を抱いていたからに他なりません。つまり常不軽菩薩は自分と敵対するような相手の心に、実は「ほとけさま」が見えていたのです。我われの常識では、心を閉ざしてしまつてこれ以上関わりをもちたくないという相手に對しても、しっかりと心を開いていける道を示しているのだと云えるでしょう。そしてその抛り所とか、根拠といえるのは、その相手の中に「ほとけさま」を感じ取り、その心情を通して相手を伏し拝むという姿となつて現われるのでしょうか。

このように見えますと、上に述べたように相手の中に「ほとけさま」を見るとか、感じ取ることがあらためて大きな問題となつてまいります。そこでその前に『法華經』がつよく訴える「一仏乗」の教説について、振り返つておく必要があると思ひます。ご承知の方がたも多いでしょうが、『法華經』には「如来が出世せられたのは、

衆生に仏知見を開かせ、示し、悟らせ、その道に入らせんがためである」と説かれ、いわゆる「一仏乗」の眞実が説き明かされております。そしてこの「一仏乗」の教説こそが、『法華経』の全体を貫いている一つの根本精神であることは云うまでもありません。言い換えると、一切の衆生、すべての人びとがひとしく成仏する、仏の智慧を体得し得るといふのですから、すべての人が人間として成就されるべきであること、言い換えるとすべての人が本来的に完全に平等であるという主張が聞こえてくるように思われるのです。すくなくとも私たちのように、あの人は善いひとだ、この人は悪い人だといって勝手に評価してある人には近づき、ある人は遠ざけるといって別け隔てるのは、全く次元の異なる人間観に立っていることに気付かされるのです。

五

このように考えてきますと、私たち人間の有りようはまことに不思議だと云わねばなりません。それは本来「いっしょ」である筈の人間社会が、「いっしょ」を求めていけばいくほど困難な問題にぶつかり、その問題の根が底知れぬ深いものであることに驚きとともに怖れさえ感ずるのです。さらに云えば、そのあるべき姿の実現に努力すればするほど、却って遠ざかってしまっている自分の姿に深い嘆きや痛みを覚えることもありましょう。こういった人間の本質に対して、実は「不可思議」——言葉も思惟も越えたもの——として多くの經典には示されているでしょう。

振り返って今日の主題であります「不可思議」と説かれる仏意について考えてみますと、たとえば常不軽菩薩が悪人も必ず作仏するのだという信念のもとに礼拝していったというのは、ほかならぬ我われ衆生自身の「不可思議」さに気付いていたからだといえないでしょうか。多くの經典にしばしば見られる「不可思議」とは、仏教の説く眞実そのものを表そうとしたに相違ありませんし、また私たちが仏教の研究をするというのも仏教にいう「不可思議」とは何であるかを問うことでありましょうが、その眞実なるものは私たち自身の中に見いだされるべきことを示唆してい

るのだと思います。そして私たちの前には数多くの經典があり、それぞれの經典にはまたさまざまな教えが説かれておりますが、これらの文章や言葉はいずれも「不可思議」なるものを指し示すための方便であり、この經典の言葉を通して經典が明らかにしようとするものに迫る努力が私たちの仏教研究の最高目標であると云えるのではないでしょうか。

『維摩經』には、「維摩の一黙」という有名な教説があります。これは仏教の大切な教えてあります「不二法門に入る」とはどういうことか、をめぐって多くの菩薩たちがそれぞれに自らの領解を述べる一段ですが、最後に文殊菩薩が「それは言葉では表現できない真理である」と応えて、この領解こそが「不二法門に入る」ことを最もよく言い表わすものとされました。その上で文殊菩薩は維摩の領解を問うたところ、維摩は黙然としたままであったということです。文殊菩薩のように「言葉では表せない」ということもできない維摩は、この「不可思議」なるものに対してただ黙っているだけだったというのですが、後世この維摩の態度について「維摩の一黙、万雷のごとし」といつて絶賛されるようになったのです。「一黙」のうちに籠められたあらゆる言葉を越えた真理が、あるいはまさしく「不可思議」なるものが、見事に人びとの心の中にしっかりと浸み透ったことを教えてくれる名句であります。

仏教の研究というのは、このような「不可思議」の探険であります。私たちはこれから共どもに、この不思議な世界に足を踏み入れることになるのです。未知への飽くなき知的欲求と真の自己発見へ向けて、確固とした自覚を新たにしたものだと願わずにおれません。今日のお話はこれをもって終わらせていただきます。